太宰治「如是我聞」注釈（一）

尾﨑めぐみ・片木晶子・近藤史織・堀万佑子・李娜娜・山口俊雄

［要旨］太宰治晩年のエッセイ「如是我聞」（『新潮』一九四八・三、五～七）は、《日本の既成文学に対するもっとも本質的な批判を行った歴史的な記念碑として、最重要に評価したい》（奥野健男「解説」、太宰治『もの思う葦』新潮社、二〇〇二、三一七頁）という声はあるものの、外国文学者や志賀直哉への激越な批判が書き連ねられているため、冷静に読むことが難しいテクストである。太宰治の作品としても重要であり、また文学史的な価値を持つ文章という認識のもと、このテクストを冷静に読み、適切に評価するための一助として、ここに注釈を試みる。

［キーワード］弱者・先輩後輩・家庭・民主主義・封建思想・奴隷根性・志賀直哉

〈凡例〉

- 「如是我聞」をはじめとする太宰治の文章からの引用はすべて青空文庫に拠った。多くの読者が容易にアクセスできる本文を選ぶことが望ましいという判断からである。
- 太宰の文章の執筆（推定）時期については、山内祥史「解題」（『太宰治全集』筑摩書房、一九八九～九二）、同『太宰治の年譜』（大修館書店、二〇一二）に拠った。
- 他作家の文章からの引用も含め、仮名遣いは原文通り、漢字は通行の字体とした。引用文中の［　］内の言葉は引用者による補足である。
- 青空文庫、JapanKnowledge ほか、ウェブページからの引用の閲覧日は二〇二二年一月一〇日である。
- 本文は掲載号ごとに一から四までに分かれているが、紙幅の都合により、今回は一から三までの注釈を掲載する。

◇タイトル「如是我聞」について

如是我聞とは、『日本国語大辞典』（JapanKnowledge、以下同）に《（このように私は聞いたの意）仏語。経の冒頭に書かれていることば。経典が編集された時、その経が間違いなく釈迦のことばであることを示そうとしたことば。また、聞いたことを信じて疑わないことを示したことば。》とあるように、元来、師の教えの信憑性を担保するために弟子が用いた

言葉だが、太宰が以下「如是我聞」で展開するのは、世の《文化人》や《老大家》の言説への辛辣な批判であり、師説の肯定的な伝達ではない。〈このように私は聞いた、そこで私は批判反駁する〉という姿勢だろう。仏典の権威付けのための言葉を、逆に世の権威付けられた言説を批判するために逆用している。これは、かなり挑発的なタイトルの付け方と見ることができる。

一

他人を攻撃したって、つまらない。攻撃すべきは、あの者たちの神だ。敵の神をこそ撃つべきだ。でも、撃つには先ず、敵の神を発見しなければならぬ。ひとは、自分の真の神をよく隠す。

これは、仏人ヴァレリイの呟きらしいが、自分は、この十年間、腹が立っても、抑えに抑えていたことを、これから毎月、この雑誌（新潮）に、どんなに人からそのために、不愉快がられても、書いて行かなければならぬ、そのような、自分の意思によらぬ「時期」がいよいよ来たようなので、様々の縁故にもお許しをねがい、或いは義絶も思い設け、こんなことは大袈裟とか、或いは気障とか言われ、あの者たちに、顰蹙せられるのは承知の上で、つまり、自分の抗議を書いてみるつもりなのである。

◇《他人を攻撃したって、つまらない。［略］ひとは、自分の真の神をよく隠す。》……若干の字句の変更はあるが『文学論』（堀口大学訳、第一書房、一九三八、斎藤書店、一九四六、二五四、二五五頁）に拠る。第一書房版も斎藤書店版も紙型同一。

後段（四）で「小僧の神様」にちなんで「小説の神様」と呼ばれた志賀直哉に触れるための布石・伏線という面もあるのかもしれない。

私は、最初にヴァレリイの呟きを持ち出したが、それは、毒を以って毒を制するという気持もない訳ではないのだ。私のこれから撃つべき相手の者たちの大半は、たとえばパリイに二十年前に留学し、或いは母ひとり子ひとり、家計のために、いまはフランス文学大受け、孝行息子、かせぐ夫、それだけのことで、やたらと仏人の名前を書き連ねて以て、所謂「文化人」の花形と、ご当人は、まさか、そう思ってもいないだろうが、世の馬鹿者が、それを昔の戦陣訓の作者みたいに迎えているらしい気配に、「便乗」している者たちである。また、もう一つ、私のどうしても嫌いなのは、古いものを古いままに肯定している者たちである。新らしい秩序というものも、ある筈である。それが、整然と見えるまでには、多少の混乱があるかも知れない。しかし、それは、金魚鉢に金魚藻を投入したときの、多少の混濁の如きものではないかと思われる。

◇《毒を以って毒を制するという気持ちもない訳ではないのだ。》……フランス人ポール・ヴァレリイ（一八七一～一九四五）の言葉を引き合いに出して日本のフランス文学者を批判するということ。冒頭にヴァレリイの文言を掲げることについて、決して衒学性によるものではないという一種の釈明も含まれているか。

◇《所謂》……《所謂》は「如是我聞」全体で三十四回使用される。《世間一般にいわれている。また、一般にそうたとえられている。》（『日本国語大辞典』）という意味の《所謂》の多用は、世間一般に言われてい

ること、社会通念に対して批判を重ねてゆく太宰＝《私》の姿勢と切り離せない。

◇《「文化人」》……太宰の「文化人」に対する認識については、「十五年間」（『文化展望』一九四六・四）の中に次のような言及がある。

結局、私がこの旅行で見つけたものは「津軽のつたなさ」というものであった。［略］けれども同時に私は、それに健康を感じた。ここから、何かしら全然あたらしい文化（私は、文化という言葉に、ぞっとする。むかしは文花と書いたようである）そんなものが、生れるのではなかろうか。［略］

このごろの所謂「文化人」の叫ぶ何々主義、すべて私には、れいのサロン思想のにおいがしてならない。［略］それらの主義が発明された当初の真実を失い、まるで、この世界の新現実と遊離して空転しているようにしか思われないのである。

当時、第二次大戦後の軍国主義的な天皇制国家崩壊後の空白を埋める国家理念として、「文化国家」が一時、平和国家、民主国家などと並んで指導的国家理念として唱えられており、文化国家云々は当時の流行語だったことにも留意すべきだろう。例えば、昭和天皇が日本国憲法公布記念式典（一九四六年一一月三日）で発した勅語の中に《朕は、国民と共に、全力をあげ、相携へて、この憲法を正しく運用し、節度と責任とを重んじ、自由と平和とを愛する文化国家を建設するやうに努めたいと思ふ》（国立国会図書館国会会議録検索システムに拠る）とあった。

◇《昔の戦陣訓の作者みたいに》……「戦陣訓」は《昭和十六年（一九四一）一月八日、陸軍大臣東条英機が部内に示達した戦場における軍人の具体的行動の準拠を示した文書》で《精神主義と捕虜の絶対否定は、太平洋戦争中の絶望的な戦局の中でも、「玉砕」以外に選ぶ道を認めず多くの命を犠牲にした》（藤原彰、『国史大辞典』Japan Knowledge、以下同）ことで知られる。太宰のなぞらえのポイントとなるのは、士気向上のために良かれと作文した者（軍部の役人）と戦争・戦場の実態の無残なまでの乖離であろう。同様に、文学への、創作の現場への理解・見識を持たない文化人の発言や意見が、絶対的な権威を持った言葉として迎えられてしまうというのだろう。

《世の馬鹿者が》と、受け取る側への批判も書き込まれている点は、（一）の終わり近くの《所謂「若い者たち」もだらしがないと思う。雛段をくつがえす勇気がないのか。君たちにとって、おいしくもないものは、きっぱり拒否してもいいのではあるまいか》につながってゆくだろう。

◇《古いものを古いままに肯定している者たち》……後段（三）《先輩というものがある》との関係に注意したい。太宰は《先輩》の地位が確保されている理由として《読者の奴隷根性》を挙げている。

> それでは、私は今月は何を言うべきであろうか。ダンテの地獄篇の初めに出てくる（名前はいま、たしかな事は忘れた）あのヱルギリウスとか何とかいう老詩人の如く、余りに久しくもの言わざりしにより声しわがれ、急に、諸君の眠りを覚ます程の水際立った響きのことは書けないかも知れないが、次第に諸君の共感を得る筈だと確信して、こうして書いているのだ。そうでもなければ、この紙不足の時代に、わざわざ書くてもないだろう、ではないか。

◇《（名前はいま、たしかな事は忘れた）あのヱルギリウスとか何とかいう老詩人》……ヱルギリウス（ヴェルギリウス）で合っているにもかかわらずわざわざ韜晦しているのは、衒学的（ペダンティック）と取られることを回避す

るためか。

◇《余りに久しくもの言わざりしにより声しわがれ》……『神曲 地獄篇』の「第一歌」でダンテが豹と獅子と雌狼に出会い、進退きわまったときに古代ローマの大詩人ヴェルギリウス（前七〇～前一九）が次のように登場する。

わが低き処へ走りくだりしとき、ひとりの人の姿は目の前に現れぬ。その声は久しく物言はざりしによりて嗄れたりとおぼし。（生田長江訳、『世界文学全集 第一巻 神曲』新潮社、一九二九、三頁）

一群の「老大家」というものがある。私は、その者たちの一人とも面接の機会を得たことがない。私は、その者たちの自信の強さにあきれている。彼らの、その確信は、どこから出ているのだろう。所謂、彼らの神は何だろう。私は、やっとこの頃それを知った。

家庭である。

家庭のエゴイズムである。

それが結局の祈りである。私は、あの者たちに、あざむかれたと思っている。ゲスな言い方をするけれども、妻子が可愛いだけじゃねえか。

私は、或る「老大家」の小説を読んでみた。何のことはない、周囲のごひいきのお好みに応じた表情を、キッとなって構えて見せているだけであった。軽薄も極まっているのであるが、馬鹿者は、それを「立派」と言い、「潔癖」と言い、ひどい者は、「貴族的」なぞと言ってあがめているようである。

世の中をあざむくとは、この者たちのことを言うのである。軽薄ならば、軽薄でかまわないじゃないか。何故、自分の本質のそんな軽薄を、他の質と置き換えて見せつけなければいけないのか。軽薄を非難しているのではない。私だって、この世の最も軽薄な男ではないかしらと考えている。何故、それを、他の質とまぎらわせなければいけないのか、私にはどうしても、不可解なのだ。

所詮は、家庭生活の安楽だけが、最後の念願だからではあるまいか。女房の意見に圧倒せられていながら、何かしら、女房にみとめてもらいたい気持、ああ、いやらしい、そんな気持が、作品の何処かに、たとえば、お便所の臭いのように私を、たよりなくさせるのだ。

わびしさ。それは、貴重な心の糧だ。しかし、そのわびしさが、ただ自分の家庭とだけつながっている時には、はたから見て、頗るみにくいものである。

そのみにくさを、自分で所謂「恐縮」して書いているのならば、面白い読物にでもなるであろう。しかし、それを自身が殉教者みたいに、いやに気取って書いていて、その苦しさに襟を正す読者もあるとか聞いて、その馬鹿らしさには、あきれはてるばかりである。

◇《一群の「老大家」というものがある。》……《一群の》とあることに注意したい。具体的には志賀直哉が取り上げられるが、《私》の視線が志賀直哉のみに向いているわけではないことは見逃せまい。また、〈何々というものがある〉式の主題の立て方が、このあと、（三）で《謀叛という言葉がある。》《先輩というものがある。》《志賀直哉という作家がある。》《おけらというものがある。》という風に何度か繰り返される。モノとしてよそよそしく否定的に主題提示するという感じだろうか。

◇《所謂、彼らの神》《家庭である。／　家庭のエゴイズムである。》

……（三）で《手を抜いてごまかして、安楽な家庭生活を目ざしている仕事をするのは、善なりや。》《家族の保全》と再登場し、（四）でも志賀直哉について《アマイ家庭生活》という言い方が出て来る。

太宰は小説「家庭の幸福」（『中央公論』一九四八・八、一九四八年二月末脱稿）末尾に《私にこの小説を思いつかせたものは、かの役人のヘラヘラ笑いである。あのヘラヘラ笑いの拠って来る根元（こんげん）は何か。所謂「官僚の悪」の地軸は何か。所謂「官僚的」という気風の風洞は何か。私は、それをたどって行き、家庭のエゴイズム、とでもいうべき陰鬱な観念に突き当り、そうして、とうとう、次のような、おそろしい結論を得たのである。曰（いわ）く、家庭の幸福は諸悪の本（もと）。》と書き込んでいる。「如是我聞」（一）の執筆が一九四八年二月二七日なので、ほぼ同時期の執筆となる。

◇《或る「老大家」》……後段を読み進めれば志賀直哉であることがはっきりする。

◇《「立派」と言い、「潔癖」と言い》《「貴族的」なぞと言って》……ここはおそらく志賀直哉（の作品）の評価の傾向を言っており、特定の言説を踏まえたものではなさそうだが、以下にいくつか具体例を示しておこう。

一見非常に貴族的（アリストクラチツク）である。さうしてそれはその着物や、住居からきり離しても、丸裸でお湯に入って居るところを見ても、貴族だと感じられるであらうやうなそれなのである。［略］

私は作品の事をも大分言つたやうであるが、私には志賀さんを作品と人とが切り離して考へられないのである。さうして、人にも作品にも温い、いゝ心持があると同時に、又犯し難いといふか、近づきがたいといふか、兎に角どこかに少し自己を韜晦したやうなところもあるやうにも思ふ。さうしてこれが貴族主義の一面でもある。

（佐藤春夫「（人の印象〈其十〉志賀直哉氏の印象）人と作品とがそつくり」『新潮』一九一七・一一、四〇、四一頁）

志賀直哉氏の作品は何よりも先にこの人生を立派に生きてゐる作家の作品である。［略］志賀直哉氏はこの人生を清潔に生きてゐる作家である。それは同氏の作品の中にある道徳的口気にも窺はれるであらう。（芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な―併せて谷崎潤一郎氏に答ふ」〈五　志賀直哉氏〉『改造』一九二七・四、一六五頁、総ルビは省略）

かういふ感覚もみんながもつてゐる。しかし志賀さんほど他人に対しても自分に対しても潔癖でないのである。（谷川徹三「私の見た志賀さん」『文芸』一九三六・一一、二四頁）

◇《馬鹿者》《襟を正す読者》……読者、受け手をも問題にしていることに注意したい。

人生とは、（私は確信を以て、それだけは言えるのであるが、苦しい場所である。生れて来たのが不幸の始まりである。）ただ、人と争うことであって、その暇々に、私たちは、何かおいしいものを食べなければいけないのである。

ためになる。

それが何だ。おいしいものを、所謂「ために」ならなくても、味わなければ、何処に私たちの生きている証拠があるのだろう。おいしいものは、味わなければいけない。味うべきである。しかし、いままでの所謂「老大家」の差し出す料理に、何一つ私は、おいしいと感じなかった。

ここで、いちいち、その「老大家」の名前を挙げるべきかとも思

うけれども、私は、その者たちを、しんから軽蔑しきっているので、名前を挙げようにも、名前を忘れていると言いたいくらいである。

みな、無学である。暴力である。弱さの美しさを、知らぬ。それだけでも既に、私には、おいしくない。

何がおいしくて、何がおいしくない、ということを知らぬ人種は悲惨である。私は、日本の（この日本という国号も、変えるべきだと思っているし、また、日の丸の旗も私は、すぐに変改すべきだと思っている。）この人たちは、ダメだと思う。

芸術を享楽する能力がないように思われる。むしろ、読者は、それとちがう。文化の指導者みたいな顔をしている人たちのほうが、何もわからぬ。読者の支持におされて、しぶしぶ、所謂不健康とかいう私（太宰）の作品を、まあ、どうやら力作だろう、くらいに言うだけである。

おいしさ。舌があれていると、味がわからなくて、ただ量、或いは、歯ごたえ、それだけが問題になるのだ。せっかく苦労して、悪い材料は捨て、本当においしいところだけ選んで、差し上げているのに、ペロリと一飲みにして、これは腹の足しにならぬ、もっとみになるものがないか、いわば食慾に於ける淫乱である。私には、つき合いきれない。

何も、知らないのである。わからないのである。優しさということさえ、わからないのである。つまり、私たちの先輩という者は、私たちが先輩をいたわり、かつ理解しようと一生懸命に努めているその半分いや四分の一でも、後輩の苦しさについて考えてみたことがあるだろうか、ということを私は抗議したいのである。

◇《おいしいものを、所謂「ために」ならなくても、味わなければ、何処に私たちの生きている証拠があるのだろう。》……〈ためになること／おいしいこと〉の対立構図が示されているが、この構図はただ単に食べ物の話に限定されず、ただでさえ苦しいことの多い人生における喜びとは何かという問題や、日本の国号や日の丸の旗の問題、芸術の享受能力の問題、《所謂「老大家」の差し出す料理》＝作品の質の問題などさまざまな次元の問題を横断的に浮かび上がらせ、〈ためになること〉重視の中で取りこぼされてしまう《弱さの美しさ》《優しさ》を残余として析出する。

◇《しんから軽蔑しきっているので、名前を挙げようにも、名前を忘れていると言いたいくらいである。》……すぐに名前を出さないことで、悪口芸としての嫌み度を高めている。

◇《無学》《暴力》／《弱さ》《優しさ》の対置。……後段（三）（四）でも、《先輩たちは、も少し、弱いものいじめを、やめたらどうか。》《弱さ、苦悩は罪なりや。》ほか、《弱さ》が主題的に取り上げられる。以下、《弱さ》に触れた太宰の文章をいくつか引いておこう。

芸術家ハ、イツモ、弱者ノ友デアッタ筈ナノニ。（「ア、秋」『若草』一九三九・一〇）

もっと気弱くなれ！　偉いのはお前じゃないんだ！　学問なんて、そんなものは捨てちまえ！／　おのれを愛するが如く、汝の隣人を愛せよ。それからでなければ、どうにもこうにもなりゃしないのだよ。（「十五年間」『文化展望』一九四六・四）

私は前にも云ったように、弱い性格なのでその弱さというものだけは認めなければならないと思っているのです。また人と議論することも私にはできない、これも自分の弱さといってもいいけれども、

何か自分のキリスト主義みたいなものも多少含まれているような気がするのです。（「わが半生を語る」『小説新潮』一九四七・一一）

◇《所謂不健康とかいう私（太宰）の作品》…かつて、例えば、「創世記」（『新潮』一九三六・一〇）が《不健康と饒舌に終始し明らかに愉快とは正反対の作》（新居格「文芸時評（一）現代ヒューマニズム文学其他」『信濃毎日新聞』一九三六・九・三〇朝刊）と評され、「HUMAN LOST」（『新潮』一九三七・四）が、《病院生活記録であるが、字義通り病的である》（河上徹太郎「文化月報 小説」『文学界』一九三七・五、二五頁）と評されたことがある。

◇《先輩》／《後輩》……非対称な関係が言われている。この点は後段でさらに展開される。

或る「老大家」は、私の作品をとぼけていていやだと言っているそうだが、その「老大家」の作品は、何だ。正直を誇っているのか。何を誇っているのか。その「老大家」は、たいへん男振りが自慢らしく、いつかその人の選集を開いてみたら、ものの見事に横顔のお写真、しかもいささかも照れていない。まるで無神経な人だと思った。

あの人にとぼけるという印象をあたえたのは、それは、私のアンニュイかも知れないが、しかし、その人のはりきり方には私のほうも、辟易せざるを得ないのである。

はりきって、ものをいうということは無神経の証拠であって、かつまた、人の神経をも全く問題にしていない状態をさしていうのである。

デリカシィ（こういう言葉は、さすがに照れくさいけれども）そんなものを持っていない人が、どれだけ御自身お気がつかなくても、他人を深く痛み傷つけているかわからないものである。

自分ひとりが偉くて、あれはダメ、これはダメ、何もかも気に入らぬという文豪は、恥かしいけれども、私たちの周囲にばかりいて、海を渡ったところには、あまりいないようにも思われる。

◇《或る「老大家」》……志賀直哉

◇《私の作品をとぼけていていやだと言っているそうだが》……該当発言は次の通り。

吉岡　太宰治はどうです。

志賀氏　年の若い人には好いだろうが僕は嫌いだ、とぼけて居るね、あのポーズが好きになれない。（「志賀直哉広津和郎両氏と現代文学を語る」『文学行動』一九四八・一、一二頁）

太宰没後の文章でも、志賀は《太宰君の小説は八年程前に一つ読んだが、今は題も内容も忘れて了った。読後の印象はよくなかった。作家のとぼけたポーズが厭だった》（志賀直哉「太宰治の死」『文芸』一九四八・一〇、三八頁）と同じ内容を繰り返している。

◇《お写真》……太宰の生前に出版された全集類から、横顔の写真を二種類確認することができた。一つは『志賀直哉全集』（改造社、一九三一）の口絵写真で《昭和四年 奈良にて》とのキャプション。もう一つは『志賀直哉全集 第一巻』（改造社、一九三七）の口絵写真で《昭和十二年七月十八日於奈良市上高畑自宅》とのキャプション。

志賀直哉の写真については、後段（四）でも二枚言及されるが、写真を引き合いに出してその人物像を批評的に語るという手法は、「小さいアルバム」（『新潮』一九四二・七）、「美男子と煙草」（『日本小説』

一九四八・三）「人間失格」の「はしがき」（『展望』一九四八・六）などでも活用されている。写真に写っている人物は、「人間失格」の「はしがき」では大庭葉蔵、「小さいアルバム」「美男子と煙草」では作者自身である。この三作品を踏まえると、写真を引き合いに出してその人物像を批評的に語るという手法を創作にではなく実在の人物に適用した点が「如是我聞」の特徴と言えよう。

◇《アンニュイ》……《〔フランス〕ennui）生活に対する意欲を失って退屈でもの憂（う）い精神状態。一九世紀末のヨーロッパを風靡（ふうび）したデカダンス文学の底流をなす。倦怠（けんたい）。倦怠感。退屈。無聊（ぶりょう）。》（『日本国語大辞典』）。後段（二）にも《アニュイ》と出て来る。

また、或る「文豪」は、太宰は、東京の言葉を知らぬ、と言っているようだが、その人は東京の生れで東京に育ったことを、いやそれだけを、自分の頼みの綱にして生きているのではあるまいかと、私は疑ぐった。

あの野郎は鼻が低いから、いい文学が出来ぬ、と言うのと同断である。

この頃、つくづくあきれているのであるが、所謂「老大家」たちが、国語の乱脈をなげいているらしい。キザである。いい気なものだ。国語の乱脈は、国の乱脈から始まっているのに目をふさいでいる。あの人たちは、大戦中でも、私たちの、何の頼りにもならなかった。私は、あの時、あの人たちの正体を見た、と思った。

あやまればいいのに、すみませんとあやまればいいのに。もとの姿のままで死ぬまで同じところに居据ろうとしている。

◇《その人は東京の生れで東京に育ったことを、いやそれだけを、自分の頼みの綱にして生きているのではあるまいか》……（四）で志賀直哉について《東京に生れて、東京に育ち、（東京に生れて、東京に育ったということの、そのプライドは、私たちからみると、まるでナンセンスで滑稽に見えるが、彼らが、田舎者という時には、どれだけ深い軽蔑感が含まれているか、おそらくそれは読者諸君の想像以上のものである。）》と述べるところから、ここの《或る「文豪」》もやはり志賀直哉のことか。

◇《国語の乱脈をなげいているらしい》……志賀の次の文章を踏まえていよう。

そこで私は此際、日本は思ひ切つて世界中で一番いい言語、一番美しい言語をとつて、その儘、国語に採用してはどうかと考へてゐる。それにはフランス語が最もいいのではないかと思ふ。六十年前に森有禮が考へた事［森は英語化を提唱した］を今こそ実現してはどんなものであらう。不徹底な改革よりもこれは間違ひのない事である。

（「国語問題」『改造』一九四六・四、九六頁）

◇《国の乱脈》の問題……《あの人たちは、大戦中でも、私たちの、何の頼りにもならなかった。私は、あの時、あの人たちの正体を見た、と思った。》については、（四）で志賀直哉「シンガポール陥落」（『文芸』一九四二・三）への言及に具体化されることになる。

所謂「若い者たち」もだらしがないと思う。雛段（ひなだん）をくつがえす勇気がないのか。君たちにとって、おいしくもないものは、きっぱり拒否してもいいのではあるまいか。変らなければならないのだ。私は、新らしがりやではないけれども、けれども、この雛段のままで

は、私たちには、自殺以外にないように実感として言えるように思う。

これだけ言っても、やはり「若い者」の誇張、或いは気焔としか感ぜられない「老大家」だったなら、私は、自分でこれまで一ばんいやなことをしなければならぬ。脅迫ではないのだ。私たちの苦しさが、そこまで来ているのだ。

今月は、それこそ一般概論の、しかもただぷんぷん怒った八ツ当りみたいな文章になったけれども、これは、まず自分の心意気を示し、この次からの馬鹿学者、馬鹿文豪に、いちいち妙なことを申上げるその前奏曲と思っていただく。

私の小説の読者に言う、私のこんな軽挙をとがめるな。

◇《雛段》……先述された《先輩》《後輩》の非対称な上下関係のこと。（三）で《「人間は人間に服従しない」あるいは、「人間は人間を征服出来ない、つまり、家来にすることが出来ない」》《民主主義》の問題と詳述される。

◆以上（一）では、上下関係の温存の中で《老大家》たちが《後輩》を圧迫するという力学が批判的に摘出されていることが確認できる。

（二）以降では批判対象が特定の人物へと絞られてゆくのに対し、この時点では《「文化人」の花形》《一群の「老大家」》とあり、太宰の視線が特定の人物のみに向けられているのではないことが分かる。しかし、後半の《或る「老大家」》《或る「文豪」》という言葉は明らかに志賀直哉を指しており、（一）執筆の時点で太宰に以降の構想がある程度形作られていたことが窺える。

二

彼らは言ふのみにて行はぬなり。また重き荷を括りて人の肩にのせ、己は指にて之を動かさんともせず。凡てその所作は人に見られん為にするなり、即ちその経札を幅ひろくし、衣の総を大きくし、饗宴の上席、会堂の上座、市場にての敬礼、また人にラビと呼ばるることを好む。されど汝らはラビの称を受くな。また、導師の称を受くな。

禍害なるかな、偽善なる学者、なんぢらは人の前に天国を閉して、自ら入らず、入らんとする人の入るをも許さぬなり。盲目なる手引よ、汝らは蚋を漉し出して駱駝を呑むなり。禍害なるかな、偽善なる学者、外は人に正しく見ゆれども、内は偽善と不法とにて満つるなり。禍害なるかな、偽善なる学者、汝らは預言者の墓をたて、義人の碑を飾りて言ふ、「我らもし先祖の時にありしならば、預言者の血を流すことに与せざりしものを」と。かく汝らは預言者を殺し者の子たるを自ら証す。なんぢら己が先祖の桝目を充せ。蛇よ、蝮の裔よ、なんぢら争でゲヘナの刑罰を避け得んや。

◇第一段落が「マタイ伝福音書」第二三章の第三～八、一〇節、第二段落が同章の第一三、二四、二七～三三節に該当する。ただし、中略されている部分も多い。太宰は『新約聖書』に描かれた、外見のみを繕い内実を伴わないまま民の上に立とうとする律法学者やパリサイ人への批判を、外国文学者のあり方に言及する（二）の冒頭に引用している。

L君、わるいけれども、今月は、君にむかってものを言うようになりそうだ。君は、いま、学者なんだってね。ずいぶん勉強したんだろう。大学時代は、あまり「でき」なかったようだが、やはり、「努力」が、ものを言ったんだろうね。ところで、私は、こないだ君のエッセイみたいなものを、偶然の機会に拝見し、その勿体ぶりに、甚だおどろくと共に、君は外国文学者（この言葉も頗る奇妙なもので、外国人のライターかとも聞えるね）のくせに、バイブルというものを、まるでいい加減に読んでいるらしいのに、本当に、ひやりとした。古来、紅毛人の文学者で、バイブルに苦しめられなかったひとは、一人でもあったろうか。バイブルを主軸として回転している数万の星ではなかったのか。

しかし、それは私の所謂あまい感じ方で、君たちは、それに気づいていながらも、君たちの自己破産をおそれて、それに目をつぶっているのかも知れない。学者の本質。それは、私にも幽かにわかるところもあるような気がする。君たちの、所謂「神」は、「美貌」である。真白な手袋である。

◇《L君》……ここは特定の人物を指しているものではあるまい。《君は外国文学者》とあるところから、language（言語）あるいはliterature（文学）の頭文字を取ったか。

◇《外国文学者（この言葉も頗る奇妙なもので、外国人のライターかとも聞えるね）》……後段で具体的な外国文学者を想定して反批判する前に、肩書き自体にも難癖を付けている。

自分は、かつて聖書の研究の必要から、ギリシャ語を習いかけ、その異様なよろこびと、麻痺剤をもちいて得たような不自然な自負心を感じて、決して私の怠惰からではなく、その習得を抛棄した覚えがある。あの不健康な、と言っていいくらいの奇妙に空転したプライドの中に君たちが平気でいつも住んでいるものとしたら、それは或いは、あのイエスに、「汝らは白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども、云々」と言われても仕方がないのではないかと思われる。

勉強がわるくないのだ。勉強の自負がわるいのだ。

私は、君たちの所謂「勉強」の精華の翻訳を読ませてもらうことによって、実に非常なたのしみを得た。そのことに就いては、いつも私は君たちにアリガトウの気持を抱き続けて来たつもりである。しかし、君たちのこの頃のエッセイほど、みじめな貧しいものはないとも思っている。

君たちは、（覚えておくがよい）ただの語学の教師なのだ。家庭円満、妻子と共に、おしるこ万才を叫んで、ボオドレエルの紹介文をしたためる滅茶もさることながら、また、原文で読まなければ味がわからぬと言って自身の名訳を誇って売るという矛盾も、さることながら、どだい、君たちには「詩」が、まるでわかっていないようだ。

◇《聖書の研究》……精神病院強制入院時（一九三六年一〇、一一月）の心情を吐露した「HUMAN LOST」（『新潮』一九三七・四）には《私は［略］キリストの卑屈を得たく修業した。》《キリストの嫋々の威厳をこそ学べ》といった文言が登場する。また、太宰は一九四一年から一九四六年にかけて無教会派の塚本虎二主宰の聖書研究誌『聖書知識』

を定期購読している。

◇《ギリシャ語を習いかけ》……年譜的事実は確認しがたいが、『聖書知識』中の記事において塚本が聖書の文言についてギリシャ語やヘブライ語等の知識をしばしば披露しており、そのことと関係があるのかもしれない。

◇《汝らは白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども》……（二）冒頭のまとまった引用の際に中略された「マタイ伝福音書」第二三章第二七節からの引用。

◇《家庭円満、妻子と共に、おしるこ万才を叫んで、ボオドレエルの紹介文をしたためる滅茶》……ボオドレエル（一八二一～六七）は、象徴主義の先駆者と評されるフランスの詩人。私生活では、混血女性ジャンヌ・デュヴァルと生涯に渡って腐れ縁に近い関係が続き、文学サロンを開いていたサバチエ夫人、舞台女優マリー・ドーブランへも実らぬ恋心を抱いた。こうした不幸な恋心が代表的詩集『悪の華』（一八五七）の随所に謳われる。こうした《家庭円満》とは程遠い境涯にこそボオドレエル文学の基盤があり、平穏な家庭生活に甘んじている者にそれが真に理解できるのかという太宰の批判である。なお、ボオドレエルの名は（二）の末尾にも再出する。

◇《「詩」》……ここでは、ポエジー、文学の本質ぐらいの意味か。

> イエスから逃げ、詩から逃げ、ただの語学の教師と言われるのも口惜しく、ジャアナリズムの注文に応じて、何やら「ラビ」を装っている様子だが、君たちが、世の中に多少でも信頼を得ている最後の一つのものは何か。知りつつ、それを我が身の「地位」の保全のために、それとなく利用しているのならば、みっともないぞ。
>
> 教養？　それにも自信がないだろう。どだい、どれがおいしくて、どれがまずいのか、香気も、臭気も、区別が出来やしないんだから。ひとがいいと言う外国の「文豪」或いは「天才」を、百年もたってから、ただ、いいというだけなんだから。
>
> 優雅？　それにも、自信がないだろう。いじらしいくらいに、それに憧（あこが）れていながら、君たちに出来るのは、赤瓦の屋根の文化生活くらいのものだろう。
>
> 語学には、もちろん自信無し。
>
> しかし、君たちは何やら「啓蒙家（けいもうか）」みたいな口調で、すまして民衆に説いている。
>
> 洋行。
>
> 案外、そんなところに、君たちと民衆とのだまし合いが成立しているのではないか。まさか、と言うこと勿（なか）れ。民衆は奇態に、その洋行というものに、おびえるくらい関心を持つ。

◇《ジャアナリズムの注文に応じて》……敗戦後、文芸雑誌の叢生の中、《外国文学者》が小説評・文芸時評に手を染めることが増えたという実情を踏まえていよう。

◇《君たちが、世の中に多少でも信頼を得ている最後の一つのものは何か》……こう問いかけて、小説評に手を染める《外国文学者》の存在理由を、このあと問い詰めて行く。

◇《どだい、どれがおいしくて、どれがまずいのか、香気も、臭気も、区別が出来やしないんだから。ひとがいいと言う外国の「文豪」或いは「天才」を、百年もたってから、ただ、いいというだけなんだから。》……（二）冒頭の「マタイ伝福音書」からの引用、特に《禍害なるかな、

偽善なる学者、汝らは預言者の墓をたて、義人の碑を飾りて言ふ、「我らもし先祖の時にありしならば、預言者の血を流すことに与せざりしものを」と。かく汝らは預言者を殺しし者の子たるを自ら証す。》と対応していよう。同時代の文学作品を正当に評価できず、時の経過により評価が定まってから事後追認的に評価するだけだとの指摘。

◇《赤瓦の屋根の文化生活》……「文化住宅」（池浩三、『国史大辞典』）の項に次のようにある。

大正時代、中産階級の勃興と第一次世界大戦の好況のなかで、大都市郊外に多く建設された住宅の俗称。この時代は、国民生活水準の向上に伴い、文化的生活ということが盛んに提唱されたため、これに便乗して、文化鍋・文化コンロなど、日常品に至るまで「文化」を冠する言葉が流行した。文化住宅もその一つで、この語感には「便利で、ちょっと垢抜けたデザイン」といったイメージがあった。それは、和風住宅の玄関脇に赤瓦葺きの洋館が付いた和洋折衷の外観、そして間取りは、八畳間が一つ、六畳間が二つほどに十畳相当の洋間が一つ、それにガス・水道の完備した台所と浴室という造りである。

田舎者の上京ということに就いて考えて見よう。二十年前に、上野の何とか博覧会を見て、広小路の牛のすき焼きを食べたと言うだけでも、田舎に帰れば、その身に相当の箔がついているものである。民衆は、これに一目をおくのだから、こたえられまい。況んや、東京で三年、苦学して法律をおさめた（しかし、それは、通信講義録でも、おさめることが出来るようだが）そのような経歴を持ったとあれば、村の顔役の一人に、いやでも押されるのである。田舎者の出世の早道は、上京にある。しかも、その田舎者は、いい加減なところで必ず帰郷するのである。そこが秘訣だ。その家族と喧嘩をして、追われるように田舎から出て来て、博覧会も、二重橋も、四十七士の墓も見たことがない（或いは見る気も起らぬ）そのような上京者は、私たちの味方だが、いったい日本の所謂「洋行者」の中で、日本から逃げて行く気で船に乗った者は、幾人あったろうか。

外国へ行くのは、おっくうだが、こらえて三年おれば、大学の教授になり、母をよろこばすことが出来るのだと、周囲には祝福せられ、鹿島立ちとか言うものをなさるのが、君たち洋行者の大半ではなかろうか。それが日本の洋行者の伝統なのであるから、碌な学者の出ないのも無理はないネ。

私には、不思議でならぬのだが、所謂「洋行」した学者の所謂「洋行の思い出」とでも言ったような文章を拝見するに、いやに、みな、うれしそうなのである。うれしい筈がないと私には確信せられる。日本という国は、昔から外国の民衆の関心の外にあった。（無謀な戦争を起してからは、少し有名になったようだ。それも悪名高し、の方である）私は、かねがね、あの田舎の中学生女学生の団体で東京見物の旅行の姿などに、悲惨を感じている者であるが、もし自分が外国へ行ったら、あの姿そのままのものになるにきまっていると思っている。

醜い顔の東洋人。けちくさい苦学生。赤毛布。オラア、オッタマゲタ。きたない歯。日本には汽車がありますの？　送金延着への絶えざる不安。その憂鬱と屈辱と孤独と、それをどの「洋行者」が書いていたろう。

所詮は、ただうれしいのである。上野の博覧会である。広小路の

牛がおいしかったのである。どんな進歩があったろうか。

妙なもので、君たち「洋行者」は、君たちの外国生活に於けるみじめさを、隠したがる。いや、隠しているのではなく、それに気づかないのか、もし、そんなだったら話にならぬ。L君、つき合いはお断りだよ。

ついでだから言うけれども、君たち「洋行者」は、妙にあっさりお世辞を言うネ。酒の席などで、作家は（どんな馬鹿な作家でも）さすがにそうではないけれども、君たちは、ああ、太宰さんですか、お逢いしたいと思っていました、あなたの、××という作品にはまいりました、握手しましょう、などと言い、こっちはそうかと思っていると、その後、新聞の時評やら、または座談会などで、その同一人が、へえ？　と思うくらいにミソクソに私の作品をこきおろしていることがたまたまあるようだ。これもまた、君たちが洋行している間に身につけた何かしらではなかろうかと私は思っている。慇懃と復讐。ひしがれた文化猿。

みじめな生活をして来たんだ。そうして、いまも、みじめな人間になっているのだ。隠すなよ。

◇《赤毛布》……《あか-ゲット【赤―】〔名〕（ゲットはケット、〔英〕blanket から）《あかケット・あかゲットー》⑴赤い毛布。⑵（⑴を外套のように羽織っていたところから）田舎から都会に出て来た人をさげすんでいう語。田舎者。おのぼりさん。⑶（⑵から転じて）不慣れな外国旅行者。》《明治初年、赤ゲットが流行し、それを東北地方の角巻きのように用いたのが、東京見物の人々の服装の特色と見られ、そこから、⑵や⑶のように「おのぼりさん」を意味するようになった。》（『日本国語大辞典』）

◇この部分では、《田舎者》の《上京》《帰郷》を《日本の洋行者》とパラレルに捉え、それらに共通する出世（階級上昇）の仕組み、外国生活のみじめさを隠すことで育まれる独特のメンタリティについて言及している。

私事ではあるが、思い出すことがある。自分が、大学へ入ったその春に、兄が上京して来て、（父は死に、兄は若くして、父のかなりの遺産をつぎ、その遺産の使途の一つとして兄は、所謂世界漫遊を思い立った様子なのである。）高田馬場の私の下宿の、近くにあったおそばやで、

「おまえも一緒に行かないか、どうか。自分は一廻りしてくるつもりだが、おまえは途中でフランスあたりにとどまって、フランス文学を研究してもどうでも、それは、おまえの好きなようにするがよい。大学のフランス文科を出てから、フランスへ行くのと、フランスへ行って来てから、大学へ入るのと、どっちが勉強に都合がよかろうか。」

私は、ほとんど言下に答えた。

「それはやはり、大学で基礎勉強してからのほうがよい。」

「そうだろうか。」

兄は浮かぬ顔をしていた。兄は私を通訳のかわりとしても、連れて行きたかったらしいのだが、私が断ったので、また考え直した様子で、それっきり外国の話を出さなくなった。

実は、このとき私は、まっかな嘘をついていたのである。当時、私に好きな女があったのである。そいつと別れたくないばかりに、

いい加減の口実を設け、洋行を拒否したのである。この女のことでは、後にひどい苦労をした。しかし、私はいまでは、それらのことを後悔してはいない。洋行するよりは、貧しく愚かな女と苦労することのほうが、人間の事業として、困難でもあり、また、光栄なものであるとさえ思っているからだ。

◇《好きな女》……小山初代（一九一二～四四）のこと。一九二七年、弘前高等学校一年生の太宰と知り合い、一九三〇年から東京で同棲を始めるも、太宰の義弟・小舘善四郎との過ちが露見、一九三七年六月に別れた。

◇洋行よりも《好きな女》を選んだこと、しかも、その後この《貧しく愚かな女と苦労をした》にも関わらず《後悔してはいない》と、自らの選択を困難かつ光栄な《人間の事業》であると、先述のギリシャ語学習を思いとどまったというエピソード同様、率直に誇らしげに語っている。

とかく、洋行者の土産話ほど、空虚な響きを感じさせるものはない。田舎者の東京土産話というものと、甚だ似ている。名所絵はがき。そこには、市民の生活のにおいが何も無い。

論文に譬（たと）えると、あの婦人雑誌の「新婦人の進路」なんていう題の、世にもけがらわしく無内容な、それでいて何やら意味ありそうに乙にすましているあの論文みたいなものだということになりそうだ。

どんなに自分が無内容でも、卑劣でも、偽善的でも、世の中にはそんな仲間ばかり、ごまんといるのだから、何も苦しんで、ぶちこわしの嫌がらせを言う必要はないだろう、出世をすればいいのだ、教授という肩書を得ればいいのだ、などとひそかにお思いになっていらっしゃるのなら、我また何をか言わんやである。

しかし、世の学者たちは、この頃、妙に私の作品に就いて、とやかく言うようになった。あいつらは、どうせ馬鹿なんで、いつの世にでも、あんなやつらがいるのだから、気にするなよ、とひとから言われたこともあるが、しかし、私はその不潔な馬鹿ども（悪人と言ってもよい）の言うことを笑って聞き容れるほどの大腹人でもないし、また、批評をみじんも気にしないという脱俗人（そんな脱俗人は、古今東西、ひとりもいなかった事を保証する）ではなし、また、自分の作品がどんな悪評にも絶対にスポイルされないほど剛（つよ）いものだという自信を持つことも出来ないので、かねて胸くそ悪く思っているひとの言動に対し、いまこそ、自衛の抗議をこころみているわけなのだ。

◇《あの婦人雑誌の「新婦人の進路」なんていう題の、世にもけがらわしく無内容な、それでいて何やら意味ありそうに乙にすましているあの論文みたいなもの》……敗戦直後期の婦人雑誌には戦後女性の進むべき道を説いた論評が散見する。太宰がこのあと批判の矛先を向ける仏文学者・渡辺一夫は『婦人公論』（一九四七・五）に「理想の女性」を寄稿し、英文学者・中野好夫は『婦人文庫』（一九四六・八）に「新しい文化、新しい女性」を寄稿している。《市民の生活》の現実を見据えないままもっともらしく語る点において、婦人雑誌の論評は《洋行者の土産話》と類似するのである。

◇《世の学者たちは、この頃、妙に私の作品に就いて、とやかく言うようになった。》……先述したように、敗戦後、《外国文学者》が小説評・

文芸時評に手を染めることが増えたという実情に言及している。

> 或る「外国文学者」が、私の「ヴィヨンの妻」という小説の所謂読後感を某文芸雑誌に発表しているのを読んだことがあるけれども、その頭の悪さに、私はあっけにとられ、これは蓄膿症ではなかろうか、と本気に疑ったほどであった。大学教授といっても何もえらいわけではないけれども、こういうのが大学で文学を教えている犯罪の悪質に慄然とした。
>
> そいつが言うのである。（フランソワ・ヴィヨンとは、こういうお方ではないように聞いていますが）何というひねこびた虚栄であろう。しゃれにも冗談にもなってやしない。嫌味にさえなっていない。かれら大学教授たちは、こういうところで、ひそかに自慰しているのであって、これは、所謂学者連に通有のあわれな自尊心の表情のように思われる。また、その馬鹿先生の曰く、（作者は、この作品の蔭でイヒヒヒヒと笑っている）事ここに到っては、自分もペンを持つ手がふるえるくらい可笑しく馬鹿らしい思いがしてくる。何という空想力の貧弱。そのイヒヒヒヒと笑っているのは、その先生自身だろう。実にその笑い声はその先生によく似合う。
>
> あの作品の読者が、例えば五千人いたとしても、イヒヒヒヒなどという卑穢な言葉を感じたものはおそらく、その「高尚」な教授一人をのぞいては、まず無いだろうと私には考えられる。光栄なる者よ。汝は五千人中の一人である。少しは、恥かしく思え。

◇《或る「外国文学者」》……渡辺一夫（一九〇一～七五）を指す。東京帝国大学仏文科卒業後、一九三一年から一九三三年にかけて文部省在外研究員としてフランスへ留学。一九四二年から同大学文学部教員。フランスのルネサンス期の文学、特にラブレーの翻訳・研究に業績を残す。

◇《私の「ヴィヨンの妻」という小説の所謂読後感を某文芸雑誌に発表している》……渡辺一夫「シニスムについて」（『文明』一九四七・九）を指す。「ヴィヨンの妻」（『展望』一九四七・三）についての言及は以下の通り。

> 私はしばらく前に太宰治氏の「ヴィヨンの妻」といふ小説を読みました。有数な作家の作品だけに、一気に面白く読めましたが、いつものやうにこの作者の精神はのがれ去つて掴めませんでした。そしてどこかで、作者がイヒヒと笑つてゐるやうな気もいたし、どうも気味が悪くてなりませんでした。イヒヒと笑ふのは、芝居のお化も笑ひますし、世をすねた人もさうですし、わざとおどけた人もさうします。その他いろいろありませう。太宰氏の書かれた作品の主人公は、帝大出のえらいインテリ文学者で、お酒がすきで、まあ身を持ちくずし（ママ）、お金を盗んだり、自分の奥さんが体を売らねばならぬやうな状態にしてしまふ、こはい人です。詳しい事は判りませんが十五世紀のフランソワ・ヴィヨンはもつと素朴のやうでした。流石は二十世紀の日本であると感心してしまひました。このこはい主人公が最後に、しきりと自分は人非人ではない旨を、とぼけたやうな、悲しいやうな、丁寧な言葉で、奥さんに説明すると、奥さんは、「人非人でもいゝぢやないの。私たちは生きてゐさへすればいゝのよ」と申すのです。（五、六頁）

渡辺は右の文章の中で《イヒヒ》という言葉を二度用いているが、太宰はこれを《イヒヒヒヒ》と記す。また、渡辺が《十五世紀のフランソワ・ヴィヨンはもつと素朴のやうでした》と述べたところも、《フラン

ソワ・ヴィヨンとは、こういうお方ではないように聞いていますが》と
する。「如是我聞」構想メモを含む『太宰治・晩年の執筆メモ』（青森県
文学館協会、二〇〇一）には、《渡辺一夫、イヒヒヒ、笑つてゐるのは、
その先生ではないか、ヴィヨンはさういふ人でなかつたやうにも聞いて
ゐますが》（一三頁）と記されており、太宰はこのメモをもとに「如是
我聞」の本文を仕立てたのだろう。構想メモで《イヒヒヒ》と一音増え
ていたのを最終的に《イヒヒヒヒ》ともう一音加え、また既に渡辺の原
文とは少々異なっていた《ヴィヨンはさういふ人でなかつたやうにも聞
いてゐますが》の《人》を《お方》と変えて嫌みな上品さを付加してお
り、このあたりは記憶違いというよりも批判のための変形加工と言えそ
うである。「如是我聞」構想メモについては安藤宏「検証・太宰治の昭
和二十三年」（『国文学』二〇〇二・一二）を参照。

元来、作者と評者と読者の関係は、例えば正三角形の各頂点の位置にあるものだと思われるが、（△の如き位置に、各々外を向いて坐っていたのでは話にもならないが、各々内側に向い合って腰を掛け、作者は語り、読者は聞き、評者は、或いは作者の話に相槌を打ち、或いは不審を訊し、或いは読者に代って、そのストップを乞う。）この頃、馬鹿教授たちがいやにのこのこ出て来て、例えば、直線上に二点を置き、それが作者と読者だとするならば、教授は、その同一線上の、しかも二点の中間に割り込み、いきなり、イヒヒヒヒである。物語りさいちゅうの作者も、また読者も、実にとまどい困惑するばかりである。

こんなことまでは、さすがに私も言いたくないが、私は作品を書きながら、死ぬる思いの苦しき努力の覚えはあっても、イヒヒヒヒの記憶だけは、いまだ一度も無い、いや、それは当然すぎるほど当然のことではないか。こう書きながらも、つくづくおまえの馬鹿さが嫌になり、ペンが重く顔がしかめ面になってくる。

最初に掲げた聖書の言葉にもあったとおり、禍害なるかな、偽善なる学者、汝らは預言者の墓をたて、義人の碑を飾りて言う、「我らもし先祖の時にありしならば、預言者の血を流すことに与せざりしものを」と。

百年二百年或いは三百年前の、謂わばレッテルつきの文豪の仕事ならば、文句もなく三拝九拝し、大いに宣伝これ努めていても、君のすぐ隣にいる作家の作品を、イヒヒヒヒとしか解することが出来ないとは、折角の君の文学の勉強も、疑わしいと言うより他はない。イエスもあきれたってネ。

◇《元来、作者と評者と読者の関係は》……ごく真っ当な〈作者・評者・読者関係〉を述べた上で、自身を取り巻く作品評の歪みを浮かび上がらせようとしている。

◇《イエスもあきれたってネ。》……軽い口調の嫌みとなっているが、この（二）の始めに述べられていた西洋文学におけるバイブル、イエスの重要性の指摘と呼応していることに注意しておきたい。

もう一人の外国文学者が、私の「父」という短篇を評して、（まことに面白く読めたが、翌る朝になったら何も残らぬ）と言ったという。このひとの求めているものは、宿酔である。そのときに面白く読めたという、それが即ち幸福感である。その幸福感を、翌る朝まで持ちこたえなければたまらぬという貪婪、淫乱、剛の者、こ

れもまた大馬鹿先生の一人であった。（念の為に言っておく。君たちは誰かからこのように言われると、ことに、私のように或る種の札（ふだ）つきみたいに見られている者から、こんなことを言われると、上品を装った苦笑を伴い、太宰先生のお説によれば、私は貪婪、淫乱、剛の者、大馬鹿先生の一人だそうであるが、などと言って軽くいなそうとする卑劣なしみったれ癖があるようだけれども、あれはやめていただく。こっちは、本気で言っているのだ。それこそ、も少し、真面目になれ。私を憎み、考えよ。）宿酔がなければ満足しないという状態は、それこそほんものの「不健康」である。君たちは、どうしてそんなに、恥も外聞もなく、ただ、ものをほしがるのだろう。

◇《もう一人の外国文学者》……中野好夫（一九〇三～八五）を指す。東京帝国大学文学部英文科を卒業し、一九三五年から同大学で文学部教員。シェークスピアやモームの研究で知られる。

◇《私の「父」という短篇を評して、（まことに面白く読めたが、翌（あく）る朝になったら何も残らぬ）と言ったという。》……「父」（『人間』一九四七・四）に触れた青野季吉・伊藤整・中野好夫「創作合評会（3）日本文壇の悲劇」（『群像』一九四七・六、六〇、六一頁）における中野の発言のことを言っている。《太宰君の場合にしても、ごく特異な人間の特異な芸術だという性格をもつていると思う》、《ますます特異になつてゆくことによつて人々の興味にうつたえている。僕はその点でいつも太宰君に不満を持つのですがね。》という青野発言を受け、中野は《しかし不満をもちながら、うまいなあと思つて最後まで楽に読めるというのはどういうことなんですかね。実は私も「父」というのは、ずつとおもしろいなと思つて読めたが、さて何が書いてあつたかなという段になると、数日前のが思い出せない。そんなふうな妙なおもしろさではないかと思う（ママ）ですね。》と発言している。

なお、中野の《数日前のが思い出せない》が《翌る朝になったら何も残らぬ》に、それがさらに《このひとの求めているものは、宿酔である》と置き換えられてゆくのは、渡辺一夫の《イヒヒ》を《イヒヒヒヒ》と伸ばしたのと同様、嫌みを込めた誇張・デフォルメとも捉えられようか。

文学に於て、最も大事なものは、「心づくし」というものである。「心づくし」といっても君たちにはわからないかも知れぬ。しかし、「親切」といってしまえば、身もふたも無い。心趣（こころばえ）。心意気。心遣い。そう言っても、まだぴったりしない。つまり、「心づくし」なのである。作者のその「心づくし」が読者に通じたとき、文学の永遠性とか、或いは文学のありがたさとか、うれしさとか、そういったようなものが始めて成立するのであると思う。

料理は、おなかに一杯になればいいというものでは無いということは、先月も言ったように思うけれども、さらに、料理の本当のうれしさは、多量少量にあるのでは勿論（もちろん）なく、また、うまい、まずいにあるものでさえ無いのである。料理人の「心づくし」それが、うれしいのである。心のこもった料理、思い当るだろう。おいしいだろう。それだけでいいのである。宿酔を求める気持は、下等である。やめたほうがよい。時に、君のごひいきの作者らしいモームは、あれは少し宿酔させる作家で、ちょうど君の舌には手頃なのだろう。しかし、君のすぐ隣にいる太宰という作家のほうが、少くとも、あのおじいさんよりは粋（いき）なのだということくらいは、知っておいてもいいだろうネ。

何もわからないくせに、あれこれ尤もらしいことを言うので、つい私もこんなことを書きたくなる。翻訳だけしていれあいいんだ。君の翻訳では、ずいぶん私もお蔭を蒙ったつもりなのだ。馬鹿なエッセイばかり書きやがって、この頃、君も、またあのイヒヒヒヒの先生も、あまり語学の勉強をしていないようじゃないか。語学の勉強を怠ったら、君たちは自滅だぜ。

分を知ることだよ。繰り返して言うが、君たちは、語学の教師に過ぎないのだ。所謂「思想家」にさえなれないのだ。啓蒙家？　プッ！ヴォルテール、ルソオの受難を知るや。せいぜい親孝行するさ。

身を以てボオドレエルの憂鬱を、プルウストのアニュイを浴びて、あらわれるのは少くとも君たちの周囲からではあるまい。

◇《モームは、あれは少し宿酔させる作家で》……モーム（一八七四～一九六五）はイギリスの小説家・劇作家。《宿酔》は先述の通り太宰が中野の言葉から引き出して来た言葉だが、その言葉を活用して、モームの《人生の価値への相対主義とそれを上回る熾烈（しれつ）な人間への好奇心が，巧みな小説技法，劇作術と相まって，彼を現代の第一級の通俗作家にした》（鈴木建三、『世界大百科事典』JapanKnowledge）とあるような通俗作家性のことを言っているか。

◇《ヴォルテール、ルソオの受難》……ヴォルテール（一六九四～一七七八）、ルソオ（一七一二～七八）ともに十八世紀フランスの王権・教権と戦った啓蒙思想家であり、自分たちの主張を展開させる代償として私生活の上で数々の犠牲を払った人物。太宰は、こうした思想家たちの《受難》と平和な家庭生活を保全する外国文学者たちとを対置し、啓蒙家気取りでいる《外国文学者》らの姿勢を批判している。

◇《ボオドレエルの憂鬱》……（二）前半にも登場したボオドレエルの名がここで再び取り上げられる。《憂鬱》の語から直ちに想起されるのはボオドレエルの代表的詩集『パリの憂鬱』（一八六九）であるが、そこでは詩人の冷静な目が常に現実社会を批評的に捉えている。現実を直視し続けたからこそ掴み得た詩人の憂愁は、肩書を保全し平和な家庭生活に甘んじる《外国文学者》に理解できるものではないという批判が込められていよう。

◇《プルーストのアニュイ》……《アニュイ》は（一）に出ていた《アンニュイ》に同じ。実生活そのものよりも、ベル・エポック末期のフランス上流階級の生活を回想して「失われた時を求めて」（一九一三～二七）を書くことにただただ傾注し続けたプルーストの生き方を端的に評した用語と言えようか。

（まったくそうだよ。太宰、大いにやれ。あの教授たちは、どだい生意気だよ。まだ手ぬるいくらいだ。おれもかねがね、癪にさわっていたのだ。）

背後でそんな声がする。私は、くるりと振向いてその男に答える。「なにを言ってやがる。おまえよりは、それは、何としたって、あの先生たちは、すぐれているよ。おまえたちは、どだい『できない』じゃないか。『できない』やつは、これは論外。でも、のぞみとあらば、来月あたり、君たちに向って何か言ってあげてもかまわないが、君たちは、キタナクテね。なにせ、まったくの無学なんだから、『文学』でない部分に於いてひとつ撃つ。例えば、剣道の試合のとき、撃つところは、お面、お胴、お小手、ときまっている筈なのに、おまえたちは、試合も生活も一緒くたにして、道具はずれの二の腕

や向う脛を、力一杯にひっぱたく。それで勝ったと思っているのだから、キタナクテね。」

◇《私》は自分が繰り出す批判や悪口を無責任に消費する物見高い野次馬的読者たちに対して批判の釘を刺しておくことを忘れない。口調は激しくとも、自分の言説が無責任な放言ではないことを明言している。

◆以上（二）では、文芸時評やエッセイの執筆に携わるようになった敗戦後の《外国文学者》を取り上げ、学者という肩書にことよせて世の中を啓蒙しようとする姿に批判の眼差しを向けている。

その視点は、（三）以降で顕著になる《先輩》という立場に対する指摘や、（四）で展開される志賀直哉崇拝とも呼ぶべき現状への批判に接続してゆく。太宰の問題意識は、既に獲得した社会的地位に甘んじ、その枠内だけで物事を捉え現実世界を直視しようとしない人々へ向けられているという点で一貫している。

三

謀叛という言葉がある。また、官軍、賊軍という言葉もある。外国には、それとぴったり合うような感じの言葉が、あまり使用せられていないように思われる。裏切り、クーデタ、そんな言葉が主として使用せられているように思われる。「ご謀叛でござる。ご謀叛でござる。」などと騒ぎまわるのは、日本の本能寺あたりにだけあるように思われる。そうして、所謂官軍は、所謂賊軍を、「すべて烏合の衆なるぞ」と歌って気勢をあげる。謀叛は、悪徳の中でも最も甚だしいもの、所謂賊軍は最もけがらわしいもの、そのように日本の世の中がきめてしまっている様子である。謀叛人も、賊軍も、よしんば勝ったところで、所謂三日天下であって、ついには滅亡するものの如く、われわれは教えられてきているのである。考えてみると、これこそ陰惨な封建思想の露出である。

むかしも、あんなことをやった奴があって、それは権勢慾、或いは人気とりの軽業に過ぎないのであって、言わせておいて黙っているうちに、自滅するものだ、太宰も、もうこれでおしまいか、忠告せざるべからず、と心配して下さる先輩もあるようであるが、しかも古来、負けるにきまっていると思われている所謂謀叛人が、必ずしも、こんどは、負けないところに民主革命の意義も存するのではあるまいか。

民主主義の本質は、それは人によっていろいろに言えるだろうが、私は、「人間は人間に服従しない」あるいは、「人間は人間を征服出来ない、つまり、家来にすることが出来ない」それが民主主義の発祥の思想だと考えている。

◇《すべて烏合の衆なるぞ》……軍歌「敵は幾万」の歌詞の一部。歌い出し部分で、《敵は幾万ありとても／すべて烏合の勢なるぞ》と続く。作詞は山田美妙、作曲は小山作之助で、明治期に作られたものだが、太平洋戦争中、ラジオでの大本営からの戦勝発表の際にも流された。

◇この部分では、抵抗はすべて成功せず、強い者・支配する側が常に強いという思想、世界認識を《封建思想の露出》として批判し、弱い側・抵抗する側が必ずしも負けるとは限らないところに《民主革命》が喧伝された敗戦後の可能性を見いだそうとしている。そして、《民主主義の

本質》を人間が人間を支配し、服従させることができないという点にあるとしている。

太宰は「人間失格」に次のように書いている。

世間。どうやら自分にも、それがぼんやりわかりかけて来たような気がしていました。個人と個人の争いで、しかも、その場の争いで、しかも、その場で勝てばいいのだ、人間は決して人間に服従しない、奴隷でさえ奴隷らしい卑屈なシッペがえしをするものだ、だから、人間にはその場の一本勝負にたよる他、生き伸びる工夫がつかぬのだ、大義名分らしいものを称えていながら、努力の目標は必ず個人、個人を乗り越えてまた個人、世間の難解は、個人の難解、大洋（オーシャン）は世間でなくて、個人なのだ、と世の中という大海の幻影におびえる事から、多少解放せられて、以前ほど、あれこれと際限の無い心遣いする事なく、謂わば差し当っての必要に応じて、いくぶん図々しく振舞う事を覚えて来たのです。（「人間失格」第三の手記・一、『展望』一九四八・七）

なお、「人間失格」第三の手記・一の執筆時期は一九四八年四月二～二八日、「如是我聞」（三）の執筆時期は五月一二～一四日。

先輩というものがある。そうして、その先輩というものは、「永遠に」私たちより偉いもののようである。彼らの、その、「先輩」というハンデキャップは、殆ど暴力と同じくらいに荒々しいものである。例えば、私が、いま所謂先輩たちの悪口を書いているこの姿は、ひよどり越えのさか落しではなくて、ひよどり越えのさか上りの態（てい）のようである。岩、かつら、土くれにしがみついて、ひとりで、よじ登って行くのだが、しかし、先輩たちは、山の上に勢ぞろいして、煙草をふかしながら、私のそんな浅間しい姿を見おろし、馬鹿だと言い、きたならしいと言い、人気とりだと言い、逆上気味と言い、そうして、私が少し上に登りかけると、極めて無雑作に、彼らの足もとの石ころを一つ蹴落（けおと）してよこす。たまったものではない。ぎゃっという醜態の悲鳴とともに、私は落下する。山の上の先輩たちは、どっと笑い、いや、笑うのはまだいいほうで、蹴落して知らぬふりして、マージャンの卓を囲んだりなどしているのである。

私たちがいくら声をからして言っても、所謂世の中は、半信半疑のものである。けれども、先輩の、あれは駄目だという一言には、ひと頃の、勅語の如き効果がある。彼らは、実にだらしない生活をしているのだけれども、所謂世の中の信用を得るような暮し方をしている。そうして彼らは、ぬからず、その世の中の信頼を利用している。

永遠に、私たちは、彼らよりも駄目なのである。私たちの精一ぱいの作品も、彼らの作品にくらべて、読まれたものではないのである。彼らは、その世の中の信頼に便乗し、あれは駄目だと言い、世の中の人たちも、やっぱりそうかと容易に合点し、所謂先輩たちがその気ならば、私たちを気狂（きちが）い病院にさえ入れることが出来るのである。

◇《先輩》と後輩との非対称な力関係、社会的な影響力の絶望的な格差について、比喩を活用しながら述べている。

◇《先輩の、あれは駄目だという一言》……この段階では一般論的に述べられているが、（三）の終わりのほうで、また（四）で、志賀直哉の具体的な発言を踏まえていることが明らかになる。あらかじめ文壇（あ

るいは社会全般）における先輩・後輩の非対称的な、民主主義以前の《封建思想》的な権力関係について問題提起しておき、自分の志賀への反発・反批判が私怨レベルのものではないという文脈を作っている。

◇《ひと頃の、勅語の如き効果》……敗戦まで、「教育勅語」を含む天皇の言葉は絶大な力を持つものであったが、それに喩えられるぐらいの効果を持っているということ。

◇《気狂い病院にさえ》……先輩の持つ権力の大きさをいうレトリックであるのみならず、作者自身が一九三六年一〇月から一一月にかけて先輩たち（井伏鱒二、北芳四郎、中畑慶吉）に欺される形で入院させられた東京武蔵野病院（閉鎖病棟）のことも念頭にあろう。その時の体験は「HUMAN LOST」に小説化されている。

奴隷根性。

彼らは、意識してか或いは無意識か、その奴隷根性に最大限にもたれかかっている。

彼らのエゴイズム、冷たさ、うぬぼれ、それが、読者の奴隷根性と実にぴったりマッチしているようである。或る評論家は、ある老大家の作品に三拝九拝し、そうして曰く、「あの先生にはサーヴィスがないから偉い。太宰などは、ただ読者を面白がらせるばかりで、……」

奴隷根性も極まっていると思う。つまり、自分を、てんで問題にせず恥しめてくれる作家が有り難いようなのである。評論家には、このような謂わば「半可通」が多いので、胸がむかつく。墨絵の美しさがわからなければ、高尚な芸術を解していないということだ、とでも思っているのであろうか。光琳（こうりん）の極彩色は、高尚な芸術でないと思っているのであろうか。渡辺崋山（かざん）の絵だって、すべてこれ優しいサーヴィスではないか。

◇《先輩》の《暴力》を是認し受け入れ、共犯関係を取り結ぶ読者の側の《奴隷根性》について述べている。これも《封建思想》を支える半面である。

◇《サーヴィス》……《或る評論家》が「読者への媚び」というぐらいの否定的な意味合いで用いた言葉を肯定的に引っ繰り返すわけだが、前段（二）の後半に出て来た《「心づくし」》と一連のものだろう。

◇《光琳の極彩色》……尾形光琳（一六五八～一七一六）、《江戸中期の画家、工芸家。》《光悦、宗達に私淑し、大胆、軽妙な画風により、近世装飾画の最高峰といわれる。》（『日本国語大辞典』）

◇《渡辺崋山》……一七九三～一八四一。《江戸後期の画家、洋学者。》《南画を谷文晁に学び、のち洋画に傾倒して独自の様式を確立、すぐれた肖像画を残した。》（『日本国語大辞典』）

◇《優しいサーヴィス》……《墨絵》の玄人（くろうと）受けする渋さに対して、光琳の装飾性に富んだ軽妙な画風が、そしてまた崋山の特に「一掃百態図」（一八一八）といった簡潔な線で庶民の生活をユーモラスに活写した作品群が念頭にあろうか。

頑固。怒り。冷淡。健康。自己中心。それが、すぐれた芸術家の特質のようにありがたがっている人もあるようだ。それらの気質は、すべて、すこぶる男性的のもののように受取られているらしいけれども、それは、かえって女性の本質なのである。男は、女のように容易には怒らず、そうして優しいものである。頑固などというもの

は、無教養のおかみさんが、持っている頗る下等な性質に過ぎない。先輩たちは、も少し、弱いものいじめを、やめたらどうか。所謂「文明」と、最も遠いものである。それは、腕力でしかない。おかみさんたちの、井戸端会議を、お聞きになってみると、なにかお気附きになる筈である。

後輩が先輩に対する礼、生徒が先生に対する礼、子が親に対する礼、それらは、いやになるほど私たちは教えられてきたし、また、多少、それを遵奉してきたつもりであるが、しかし先輩が後輩に対する礼、先生が生徒に対する礼、親が子に対する礼、それらは私たちは、一言も教えられたことはなかった。

◇ここで言及されているのは、《礼》の中でも特に敗戦までの天皇制国家を支えて来た儒教的な〈長幼の序〉のことであるが、それが一方的な非対称のものであったのを、《わたし》は相互的で対等な《先輩が後輩に対する礼、先生が生徒に対する礼、親が子に対する礼》をも含めたものに転換すべきだとし、次の《民主革命。》へと繋げる。

民主革命。

私はその必要を痛感している。所謂有能な青年女子を、荒い破壊思想に追いやるのは、民主革命に無関心なおまえたち先輩の頑固さである。

若いものの言い分も聞いてくれ！　そうして、考えてくれ！　私が、こんな如是我聞（にょぜがもん）などという拙文をしたためるのは、気が狂っているからでもなく、思いあがっているからでもなく、人におだてられたからでもなく、況（いわ）んや人気とりなどではないのである。本気なのである。昔、誰それも、あんなことをしたね、つまり、あんなものさ、などと軽くかたづけないでくれ。昔あったから、いまもそれと同じような運命をたどるものがあるというような、いい気な独断はよしてくれ。

いのちがけで事を行うのは罪なりや。そうして、手を抜いてごまかして、安楽な家庭生活を目ざしている仕事をするのは、善なりや。おまえたちは、私たちの苦悩について、少しでも考えてみてくれたことがあるだろうか。

結局、私のこんな手記は、愚挙ということになるのだろうか。私は文を売ってから、既に十五年にもなる。しかし、いまだに私の言葉には何の権威もないようである。まともに応接せられるには、もう二十年もかかるのだろう。二十年。手を抜いたごまかしの作品でも何でもよい、とにかく抜け目なくジャアナリズムというものにねばって、二十年、先輩に対して礼を尽し、おとなしくしていると、どうやらやっと、「信頼」を得るに到るようであるが、そこまでは、私にもさすがに、忍耐力の自信が無いのである。

◇《昔、誰それも、あんなことをしたね、つまり、あんなものさ、などと軽くかたづけないでくれ。昔あったから、いまもそれと同じような運命をたどるものがあるというような、いい気な独断はよしてくれ。》……（三）の第二段落目冒頭の《むかしも、あんなことをやった奴があって、それは権勢慾、或いは人気とりの軽業に過ぎないのであって、言わせておいて黙っているうちに、自滅するものだ》の繰り返し。

◇《いのちがけで》……同じ言葉が小説「美男子と煙草」でも次のように使われている。

「ひとが、ひとが、こんな、いのちがけで必死で書いているのに、みんなが、軽いなぶりものにして、……あのひとたちは、先輩なんだ、僕より十も二十も上なんだ、それでいて、みんな力を合せて、僕を否定しようとしていて、……卑怯だよ、ずるいよ、……もう、いい、僕だってもう遠慮しない、先輩の悪口を公然と言う、たたかう、……あんまり、ひどいよ。」（『日本小説』一九四八・三、脱稿は一九四八年一月中旬までの頃）

後半の《もう、いい、僕だってもう遠慮しない、先輩の悪口を公然と言う、たたかう》という言葉が実践されたのが「如是我聞」ということになろうか。

◇《いのちがけで事を行うのは罪なりや。》《善なりや。》……〈～は～なりや。〉式の表現は、後段にも出て来るし、また「人間失格」第三の手記・二（『展望』一九四八・八）にも《嗚呼、信頼は罪なりや？》《神に問う。信頼は罪なりや。》《果して、無垢の信頼心は、罪の源泉なりや。》《無垢の信頼心は、罪なりや。》《神に問う。無抵抗は罪なりや？》という風に出て来る。

なお、「人間失格」第三の手記・二の執筆時期は一九四八年四月二九日～五月八日、「如是我聞」（三）の執筆時期は先述の通り五月一二～一四日。

◇《安楽な家庭生活》……（一）で述べられた《家庭》《家庭のエゴイズム》を踏まえている。

> まるで、あの人たちには、苦悩が無い。私が日本の諸先輩に対して、最も不満に思う点は、苦悩というものについて、全くチンプンカンプンであることである。

> 何処に「暗夜」があるのだろうか。ご自身が人を、許す許さぬで、てんてこ舞いしているだけではないか。許す許さぬなどというそんな大それた権利が、ご自身にあると思っていらっしゃる。いったい、ご自身はどうなのか。人を審判出来るがらでもなかろう。

◇《苦悩》という主題の登場。

◇《「暗夜」》……続く段落で志賀直哉の名前が出て来た時に「暗夜行路」のことだと分かるが、ややフライング気味にこの言葉を出しているのは、怒り・不満の余り感情的になって手順を飛ばしているという演出だろうか。

◇《許す許さぬなどというそんな大それた権利が、ご自身にあると思っていらっしゃる。》……《許す許さぬ》とは、「暗夜行路」の謙作が妻・直子の姦通を許すかどうか煩悶するという作中の重大事のこと。《わたし》は、そもそもそんな権利を謙作が持っていないとする。この段（三）の冒頭近くで述べていた《「人間は人間に服従しない」あるいは、「人間は人間を征服出来ない、つまり、家来にすることが出来ない」》という民主主義の根本に直結している。

妻の姦通（レイプ被害）について、太宰は「人間失格」に次のように書いている。

ゆるすも、ゆるさぬもありません。ヨシ子は信頼の天才なのです。ひとを疑う事を知らなかったのです。しかし、それゆえの悲惨。神に問う。信頼は罪なりや。

ヨシ子が汚されたという事よりも、ヨシ子の信頼が汚されたという事が、自分にとってそののち永く、生きておられないほどの苦悩の種になりました。自分のような、いやらしくおどおどして、ひと

の顔いろばかり伺い、人を信じる能力が、ひび割れてしまっているものにとって、ヨシ子の無垢の信頼心は、それこそ青葉の滝のようにすがすがしく思われていたのです。それが一夜で、黄色い汚水に変ってしまいました。見よ、ヨシ子は、その夜から自分の一顰一笑にさえ気を遣うようになりました。（第三の手記・二、『展望』一九四八・八。先に見た通り執筆時期はこちらが「如是我聞」に先行する。）

志賀直哉という作家がある。アマチュアである。六大学リーグ戦である。小説が、もし、絵だとするならば、その人の発表しているものは、書である、と知人も言っていたが、あの「立派さ」みたいなものは、つまり、あの人のうぬぼれに過ぎない。腕力の自信に過ぎない。本質的な「不良性」或いは、「道楽者」を私はその人の作品に感じるだけである。高貴性とは、弱いものである。へどもどまごつき、赤面しがちのものである。所詮あの人は、成金に過ぎない。

◇《六大学リーグ戦》……一九二五年から開かれている慶応・早稲田・明治・法政・立教・東京の六大学によって毎年二回行われる野球のリーグ戦。

◇《知人》……未詳。

◇《本質的な「不良性」》……太宰は例えば、《不良とは、優しさの事ではないかしら。》（「斜陽」三『新潮』一九四七・八）、《私、不良が好きなの。それも、札つきの不良が、すきなの。》（「斜陽」四『新潮』同）と作中人物に言わせているように、一概に《不良》《不良性》を否定しているものではあるまい。だがここでは《本質的な》という形容語を被せ、さらにカギ括弧で括っており、次元の違う《不良性》が想定されているようだ。

◇《高貴性とは、弱いものである。》……やや唐突にも感じられるが、お母様、直治に託して高貴さ＝弱さを書き込んだ「斜陽」（『新潮』一九四七・七～一〇）を踏まえれば理解しやすいか。前項で見たとおり、「斜陽」で《不良》に触れていたのと接続する。

おけらというものがある。その人を尊敬し、かばい、その人の悪口を言う者をののしり殴ることによって、自身の、世の中に於ける地位とかいうものを危うく保とうと汗を流して懸命になっている一群のものの謂である。最も下劣なものである。それを、男らしい「正義」かと思って自己満足しているものが大半である。国定忠治の映画の影響かも知れない。

真の正義とは、親分も無し、子分も無し、そうして自身も弱くて、何処かに収容せられてしまう姿に於て認められる。重ね重ね言うようだが、芸術に於ては、親分も子分も、また友人さえ、無いもののように私には思われる。

◇《おけら》……《スリの相手にくっついて補助すること。》（『新修隠語大辞典』皓星社、二〇一七、一二一頁［隠語研究会『現代隠語辞典』武蔵書房、一九五六］）、《スリの買手にくっついて補助すること。》（『新修隠語大辞典』同［平野威馬雄『符牒六千語―芸者からスリまで』近代社、一九五五］）

◇《国定忠治》……《江戸末期の博徒。本名長岡忠次郎。上野国国定村（群馬県佐波郡東村）の人。義理、人情と侠気に富む人物として、実録

物、講談、戯曲などに取り上げられた。嘉永三年（一八五〇）磔（はりつけ）にされた。国定忠治。》（「国定忠次」『日本国語大辞典』）

◇《国定忠治の映画》……戦後、一九四六年にも松田定次監督、阪東妻三郎主演の『国定忠治』（大映）が制作されているが、一九二〇年代から繰り返し映画化されている。太宰は、映画その他で流布された親分子分関係に注目しているのだろう。

全部、種明しをして書いているつもりであるが、私がこの如是我聞という世間的に言って、明らかに愚挙らしい事を書いて発表しているのは、何も「個人」を攻撃するためではなくて、反キリスト的なものへの戦いなのである。

彼らは、キリストと言えば、すぐに軽蔑の笑いに似た苦笑をもらし、なんだ、ヤソか、というような、安堵に似たものを感ずるらしいが、私の苦悩の殆ど全部は、あのイエスという人の、「己れを愛するがごとく、汝の隣人を愛せ」という難題一つにかかっていると言ってもいいのである。

一言で言おう、おまえたちには、苦悩の能力が無いのと同じ程度に、愛する能力に於ても、全く欠如している。おまえたちは、愛撫するかも知れぬが、愛さない。

おまえたちの持っている道徳は、すべておまえたち自身の、或いはおまえたちの家族の保全、以外に一歩も出ない。

重ねて問う。世の中から、追い出されてもよし、いのちがけで事を行うは罪なりや。

私は、自分の利益のために書いているのではないのである。信ぜられないだろうな。

最後に問う。弱さ、苦悩は罪なりや。

◇《何も「個人」を攻撃するためではなくて》……個人攻撃が目的ではないとの断り。

◇《反キリスト的なものへの戦い》……《反キリスト的なもの》とはずいぶん大きいテーマと感じられるが、《私》は《私の苦悩の殆ど全部は、あのイエスという人の、「己れを愛するがごとく、汝の隣人を愛せ」という難題一つにかかっていると言ってもいいのである。》と「マタイ伝福音書」第二二章第三九節を踏まえて要点を簡潔に示す。隣人愛について述べた「マタイ伝」のこの箇所を太宰は自作のあちこち（「惜別」一九四五、「十五年間」「返事」「苦悩の年鑑」「冬の花火」一九四六、など）で引用している。

◇《ヤソ》……太宰の他の作品からも軽侮のニュアンスが感じ取れよう。

「それじゃあ、なんだい、［罪の対義語は法律ではなく］神か？　お前には、どこかヤソ坊主くさいところがあるからな。いや味だぜ」（「人間失格」第三の手記・二、堀木の発言）

周さんは私と同様、キリストの隣人愛には大いに敬意を表し、十字架につかざるを得ない義人の宿命を仰恋する事に於いても敢えて人後に落ちるものでは無かったが、しかし、どうも、教会の職業的なヤソ坊主の偽善家みたいな悲愴な表情や、またその教会に通う若い男女のキザに澄ました態度に辟易して［略］（『惜別』朝日新聞社、一九四五・九）

◇《おまえたちは、愛撫するかも知れぬが、愛さない。》……エロス（性愛）はあっても、アガペー（無私な愛）はないということだろう。

◇《家族の保全》……前出の《家庭のエゴイズム》《安楽な家庭生活の

安楽》（一）、《家庭円満》（二）、先ほどの《安楽な家庭生活》と繰り返し出て来るモチーフがここでも繰り返される。

これを書き終えたとき、私は偶然に、ある雑誌の座談会の速記録を読んだ。それによると、志賀直哉という人が、「二、三日前に太宰君の『犯人』とかいうのを読んだけれども、実につまらないと思ったね。始めからわかっているんだから、しまいを読まなくたって落ちはわかっているし……」と、おっしゃって、いや、言っていることになっているが、（しかし、座談会の速記録、或いは、インタヴィユは、そのご本人に覚えのないことが多いものである。いい加減なものであるから、それを取り上げるのはどうかと思うけれども、志賀という個人に対してでなく、そういう言葉に対して、少し言い返したいのである）作品の最後の一行に於て読者に背負い投げを食わせるのは、あまりいい味のものでもなかろう。所謂「落ち」を、ひた隠しに隠して、にゅっと出る、それを、並々ならぬ才能と見做す先輩はあわれむべき哉、芸術は試合でないのである。奉仕である。読むものをして傷つけまいとする奉仕である。けれども、傷つけられて喜ぶ変態者も多いようだからかなわぬ。あの座談会の速記録が志賀直哉という人の言葉そのままでないにしても、もしそれに似たようなことを言ったとしたなら、それはあの老人の自己破産である。いい気なものだね。うぬぼれ鏡というものが、おまえの家にもあるようだね。「落ち」を避けて、しかし、その暗示と興奮で書いて来たのはおまえじゃないか。

なお、その老人に茶坊主の如く阿諛追従して、まったく左様でゴゼエマス、大衆小説みたいですね、と言っている卑しく痩せた俗物作家、これは論外。

◇《ある雑誌の座談会の速記録》……「文芸鼎談　出席者志賀直哉・広津和郎・川端康成」（『社会』一九四八・四）のこと。同号の広告が『朝日新聞』一九四八年年四月一四日朝刊に、『読売新聞』一六日朝刊に載る。「如是我聞」（三）の執筆は同年五月一二～一四日。引用される志賀の発言は、一重括弧「犯人」が二重括弧になっている以外は、同誌二三頁掲載の原文に忠実。

◇《志賀直哉という人》……このような言い方がこの段落で二回繰り返されるが、このよそよそしい書き方にも嫌みが込められていよう。

◇《『犯人』》……一九四七年一一月上旬に脱稿、『中央公論』（一九四八・一）に発表。あらすじは次の通り。

鶴という若い男性が、敗戦後の部屋不足の中、会社の寮を出て恋人と一緒に暮らしたいと思い、肉屋に嫁いだ姉に空き部屋を貸してほしいと頼むが断られる。思わず店にあった包丁で姉を刺した鶴は店の売り上げを盗んで逃げる。待合で散財したあといったん勤め先の寮に戻るが、義理の兄から電話があったと同僚に言われて姉の死を確信、汽車に乗って東京を離れ、滋賀・大津駅前の旅館で睡眠薬を大量に飲んで自殺し果てた。ことを荒立てたくなくて義兄が警察沙汰にしなかったのも裏目に出て、左腕の怪我で済んでいた姉は、弟の訃報を知って自分のあしらい方を悔やむ。

◇この（三）の段階では、《しかし、座談会の速記録、或いは、インタヴィユは、そのご本人に覚えのないことが多いものである。いい加減なものであるから、それを取り上げるのはどうかと思うけれども》《あの座談会の速記録が志賀直哉という人の言葉そのままでないにしても》と留保

を付けている。次の（四）ではそういった留保はかなぐり捨てられることになる。

◇《「落ち」を避けて、しかし、その暗示と興奮で書いて来たのはおまえじゃないか。》……これについては、志賀の諸作に言及がある後段（四）のところで触れたい。

◇《卑しく痩せた俗物作家》……川端康成のこと。同じ座談会（同頁）の次のようなやり取りを踏まえる。

川端　「斜陽」を読みましたけれど、別に新しいとか、これまでの人には書けない、というような感じはありませんね。ただ連想の飛躍みたいなところは独特で面白いけれど……

広津　新しい旧いを……。

志賀　何だか大衆小説の蕪雑さが非常にあるな。

川端　それはこれから出ようとする若い人たちはもっとそうだと思いますね。懸賞小説をだいぶ読みましたけれども、だいたい通俗的ですね。それで作家らしいスタイルというものがありませんし、デッサンが非常に出来ていない。

志賀の《何だか大衆小説の蕪雑さがあるな》という発言に応じた部分に《阿諛追従》の調子を太宰は読み取っているのだろう。

◆以上（三）では、民主主義の本質である人間の平等性を明確に主張し、それに反する先輩後輩の上下関係・親分子分関係を批判し、最後にそのような先輩後輩の非対等性が現われている志賀の太宰作品言及を批判的に紹介して終わっている。

この紹介を一種助走のようにして、次の（四）では志賀批判を次々と繰り出すことになる。

尾﨑めぐみ（日本文学専攻博士課程後期一年）
片木晶子（日本文学専攻博士課程後期三年）
近藤史織（日本文学専攻博士課程前期一年）
堀万佑子（日本文学専攻博士課程前期二年）
李娜娜（日本文学専攻学術研究員）
山口俊雄（本学教授）

Notes on Dazai Osamu's "Nyoze-Gamon" (I)

OZAKI Megumi, KATAGI Akiko, KONDO Shiori, HORI Mayuko, LI Nana and YAMAGUCHI Toshio

[Abstract] The essay "Nyoze-Gamon" (1948), written in the last year of Osamu Dazai's life, has been described by some as "a historical monument to the most essential criticism of established Japanese literature, and I would like to give it the highest evaluation" (Takeo Okuno). But it is difficult to read this text calmly because of the intense criticism of foreign literary scholars and the novelist, Shiga Naoya. Recognizing the importance of this text as a work of Dazai Osamu and its value in literary history, we will attempt to annotate it here in order to help us read it dispassionately and evaluate it appropriately.

[Key Words] the weak and vulnerable, seniors and juniors, family, democracy, feudalism, slave mentality, SHIGA Naoya